

〔倭訓栞前編十八〕とき 時辰をいふ常の義也一日の十二時も一年の四時も千萬世の時世も歲

月のうつり行まゝに其常を失はざるをいふなるべし日本紀に期をよみ諱訓抄に代もよめり

又疾の義文選に時來亮急絃と見えたり

〔類聚名物考時令二〕時中 ときなか 半時の事なり一時の半なればいふなかはなかばの略に

て中といふも前後をのぞけるによりていふべし

〔大鏡四〕大臣師輔九條殿は略時中中ばかりありてぞ御すだれあげさせ給ひて略下

〔運歩色葉集遍四〕片時 〔同賀〕片時

〔倭訓栞中編四〕かたとき 僧清珙が詩に不放心身靜片時と見えたり今片時を音にもいへり半

時ともいふ也

〔空穂物語あて寧〕七條の家四條の家えはじめてかたはらより火をつけてかたときにやきほろ

ぼして山にこもりぬ

〔類聚名義抄日二〕暫正、暨今、難或、藏濫、反シ、バラ、クク 〔同三〕斯頃シ、バク 何頃同 少頃同 俄頃同

〔和爾雅二〕時間頃刻之 斯須シ、バク 倏忽シ、バク 頃間シ、バク 有頃シ、バク 食頃シ、バク 俄頃シ、バク 須臾シ、バク 俄間シ、バク 少焉シ、バク

〔書言字考節用集二〕澱辰日本 須臾文選註 斯須離一合之時也 聊且文選 俄頃瑞 頃刻上

少選會 少時頃息電頃並同 暫活久也 暫久也 暫活久也 暫久也 暫活久也 暫久也 暫活久也

〔倭訓栞前編十〕まばし 日本紀に且をよめり苟且也今瞬息の意にいへり

まばらくと暫をよめりらく反る也まばしあるを略せる詞なるべし姑をよめるは姑且の意也

神代紀に頃時をまばらくありてとよめり聊をよむも苟且より轉せるなり頃之少之もよめり

頃はほどありての意少は少時の略也斯須須臾少間なども同じ又居頃をよめり居無幾居無何